

## 資料と公共性 : 2022年度研究成果年次報告書

岡崎, 敦  
九州大学大学院人文科学研究院

清原, 和之  
島根大学学術研究院人文社会科学系 : 准教授

村野, 正景  
京都文化博物館 : 学芸員

市沢, 哲  
神戸大学大学院人文科学研究科教授 : 教授

他

<https://doi.org/10.15017/6770679>

---

出版情報 : 2023-03-10. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン :  
権利関係 :

## 産業革命を核とした「大項目 B. 近代化と私たち」の授業計画 —生徒の「当たり前」の問い直しと「歴史的思考力養成」を目指して—

高橋 毅

### はじめに

本稿では、「歴史総合」の理念を踏まえた「産業革命」を題材とした授業計画を提示する。先にお断りしておくならば、本稿で提示した授業計画案は、「歴史総合」という科目の理念（歴史の「構築性」や「テーマ史」）を挑戦的に反映しようとしたものの、報告者の技量不足により、その「理想」を十分に表現できたとは言い難く、不完全なものとなっている。この授業計画案を叩き台にして、より良いものを作っていただければ幸いである。

本稿が授業の素材として選定したのは、『歴史総合をつむぐ』の「⑤産業革命」の「産業革命はなぜ『革命』と呼ばれるのか」（長谷川貴彦）と「時間認識の変化」（橋本毅彦）である<sup>52</sup>。また、文章中心のこれらのネタ本を補足する教材として、『資料と問いから考える歴史総合』も適宜使用した<sup>53</sup>。以下では主として参考にした章の内容を概観した上で、授業計画・授業構成に移りたい。

### 単元計画、授業計画の題材と構想

まず長谷川の章は、「産業革命はなぜ『革命』と呼ばれるのか」というタイトルのもと、「革命」という語が歴史的に構築されてきた過程を整理している。

長谷川の整理によれば、イギリスの「産業革命」の解釈は、①トインビーによる古典的見解、②トインビー批判、③「産業革命」の再評価、④修正主義、⑤リハビリテーション、⑥「大分岐」論に分けられる<sup>54</sup>。

<sup>52</sup> 長谷川貴彦：「産業革命はなぜ『革命』と呼ばれるのか」、橋本毅彦「時間認識の変化」歴史学研究会編 2022：『歴史総合をつむぐ ー新しい歴史実践へのいざないー』東京大学出版会、pp. 65-79。

<sup>53</sup> 高校歴史教育研究会編 2022：『資料と問いから考える歴史総合』浜島書店。

<sup>54</sup> 以下の文献も参考にした。長谷川貴彦 2012：『産業革命（世界史リブレット）』山川出版社。

イギリスにおける「革命」という語は、歴史家アーノルド・トインビーの『英国産業革命講義』(1884)でイギリス人たちの間に広まることとなった。ここにおける「産業革命」は、1760年ごろから1850年ごろにかけて古い経済体制が「蒸気機関と力織機の力強い一撃」によって急激に変化=断絶するものとして捉えられた(①)。

その後立ち現れたトインビー批判においては、産業革命の「断絶性」は否定される(②)。綿工業の領域において1850年までに一部が劇的に変化したに過ぎず、経済の諸部門は実質的に変化していないとされた。しかし第二次世界大戦終結後の復興ブームの中で、「産業革命」が再評価され、近代化論者(ウォルト・ロストウ)やマルクス主義者(エリック・ホブズボーム)によってその「断絶性」が再び強調される(③)。例えば前者は、産業革命とは工業化に向けた「離陸」の時期であり、その後経済成長が持続されたと主張する。

しかし1970年代~80年代ごろからは「英国病」と呼ばれるイギリス経済の衰退を背景として、修正主義的な見解が登場する(④)。経済史家ニック・クラフツは、19世紀初頭のイギリスの国民総生産の成長率や工業生産高の増加率において、「離陸」概念で示された「急激な変化」というよりは「緩慢な成長」をみてとり、「産業革命不在論」を唱えた。ここにおいて、成長率という統計的手法は産業革命という複雑な社会現象を捉えるには不十分であり、成長率の測定自体は重要でないというコンセンサスが生まれた。

その後、産業革命論は経済的成長率の問題から別の領域へ移ることとなる(⑤)。例えば一連の発明や技術的革新を再評価する研究、有機物依存経済から鉱産物依存経済への劇的変化を「エネルギー革命」とする研究、供給から需要の側面に重心を移して労働者の心性の変化を「勤勉革命」として描く研究などが、1990年代までに登場した。

そしてその後、ケネス・ポメランツの「大分岐」論では、産業革命の断絶性はグローバルなレベルで示されることとなった(⑥)。ポメランツによれば、農業の革新、プロト工業化、地域間分業の進展などの近世の経済発展においてはイングランドも中国も共通の経済発展を遂げていたが、両者ともに「マルサスの罠」(人口増加が食糧生産の増加の割合を上回る構造)のもとに置かれており発展の限界が訪れる。そうしたアジアとヨーロッパの差異を決定づけていく「大分岐」が訪れるのは、偶然にも石炭と海外植民地という地理的条件を備えたイギリスにおける産業革命の開始であったという。

以上のような内容は、1~2時間の授業であつかうには情報量があまりにも多く、非現実的な授業計画になってしまう。しかし「産業革命」という「近代化」の一側面を表す

---

語の「構築性」を学ぶことは、「歴史総合」でも重要なテーマとなり得るだろう。そこでむしろ、内容の膨大さを逆手に取り、主として長谷川の叙述を参考に、「産業革命」をメインに据えた大項目「B. 近代化と私たち」の授業計画の構想をしてみようと考えた。

一方、橋本の章では、「産業革命」をきっかけに生活のレベルで起きた「時間概念」の形成・変化について書かれている。こちらのテーマは、『資料と問いから考える歴史総合』では、「時間の誕生」というテーマで「歴史への扉」で扱われている題材である<sup>55</sup>。こちらは「近代化と私たち」で「産業革命」を扱うことを鑑み、事前に「歴史への扉」で教科書的な説明を「面白い」事例とともに学んでおく準備段階（「扉」）として用いた。

ここで歴史の「構築性」に加えて、「世界の中の日本」をテーマとする「歴史総合」において必要となるのは、イギリスを「外」から眺める視点や、グローバルな比較史である。そこで上述の長谷川のイギリスにおける革命解釈の変遷を土台にしつつも、フランスからはじめてイギリスの産業構造の変化を「革命」と呼んだ人物とされる経済学者ジェローム・アドルフ・ブランキに焦点をあてた<sup>56</sup>。長谷川が『歴史総合をつむぐ』で提示している産業革命の構築性を、フランスの視点を加えることでより多角的に捉えられるのではないかと考えたからである。また後述するように、ブランキの著書ではイギリスの産業構造の変化をフランスの政治的変革（フランス革命）を引き合いに出しながら「革命」と表現されており、「市民革命」と「産業革命」という「近代化」を考える上で重要な二つの革命を絡められる可能性が示されている。よって本稿では、テーマの授業計画を提示しつつ、ブランキに着目した1~2時間の授業案を紹介したい。

---

<sup>55</sup> 高校歴史教育研究会編 2022：『資料と問いから考える歴史総合』浜島書店、pp. 14-15。

<sup>56</sup> ブランキへの言及は、『歴史総合をつむぐ』ではなく、同じく長谷川の『世界史リブレット』にみられる。報告者がブランキの史料の使用を思いついたのは、この『リブレット』の叙述からである。長谷川は、19世紀後半のイギリスにおいてフリードリヒ・エンゲルスやアーノルド・トインビーの著作が登場する以前に、19世紀の前半にフランスでブランキがイギリスの社会経済的転換を「産業革命」と表現したことを「興味深い事実」と評している。なお、はじめて「産業革命」という語を使用されたのは1799年のフランス外交官ルイ・ギョーム・オットーによるものである。長谷川貴彦、前掲書、p. 7。

## 年間授業計画、単元計画、各授業の内容

授業計画をつくるにあたり、まずは仮想の年間計画を設定した。「歴史総合」で想定されている大項目 A~D に、18 世紀以前=近代化以前の世界を取り扱うテーマ史の「序章」を加えて、序章に 5 時間、B~D にそれぞれ 15 時間設け、年間合計約 50 時間を想定した<sup>57</sup>。

ではこの年間計画のうち、「近代化と私たち」のところにスポットライトをあてていこう。今回は「産業革命」を核にするということで、長谷川の「タイトル」をかりて、①「産業革命はなぜ『革命』と呼ばれるのか？」を、単元をつらぬく授業者からのクエスチョンにした。これに連なる形で、①『『近代化』『革命』とはなにか』、②『『市民革命』とはなにか』、③「産業革命はいつから生まれたのか」、④「イギリス産業革命はどういったところが革命だったのか」、⑤『『生活革命』とはどのようなものか』、⑥日本にとっての『革命』は何か、⑦『『近代化』『革命』とは何か』という 7 つの授業ごとのメインクエスチョンを想定している<sup>58</sup>。

前提として、①「産業革命はなぜ「革命」と呼ばれるのか？」という単元を貫く問いのもと、この授業計画全体を通して想定している授業者の狙いなどを確認したい。その狙いは、「革命」とは何かを考えることを通して、生徒に歴史の「事実」と「解釈」とを区別する視角を会得してもらうことである。それを通して、「近代化」という歴史的なものの見方考え方を理解してもらいたい。よって本授業計画は「網羅的な知識を身につけること」=「教科書を丸々取り扱うこと」ではなく、歴史の「構築性」を体感してもらうことを主眼としている。つまり本授業では、あえて詳細な政治史・事件史・文化史は無視し、「面白さ」と「見方・考え方」を重視している。

なおそれを鑑みると、教科書はあくまで補助教材として扱い、「辞書」的な役割を与えるにとどめるのが妥当であろう。そこで教科書は詳細かつ論理的な叙述を心がけているとされる山川出版社の『歴史総合 ー近代から現代へー』（オレンジの表紙）を使用

---

<sup>57</sup> 「歴史への扉」「B. 近代化と私たち」以外のところは本報告では取り扱いきれなかったため、仮の設定としている。なお、年間授業計画については、以下の文献を参考にした。勝山元照「新しい世界史教育として『歴史総合』を創る ー「自分の頭で考え、自分の言葉で表現する」歴史学習への転換ー」小川幸司編著 2021:『岩波講座世界史 01 世界史とは何か』岩波書店 pp. 307-24。

<sup>58</sup> それぞれの問いごとに、計 2 時間の授業を行うことを想定している。

する<sup>59</sup>。また、授業形態については「知識構成型ジグゾー法」と「講義型」授業、調べ学習などを複合的に用いる。

以上を踏まえここからは、ブランキを扱う③を主軸としつつ、①～⑦の問いのもと行う予定の授業内容について説明する。

まず①『『近代化』『革命』とはなにか』という問いのもとでは、生徒の中にある「革命」という言葉のイメージを引き出すところから始め、それを足がかりに教科書や国語辞典などで「革命」（アメリカ独立革命、フランス革命、産業革命）をそれぞれ調べてもらい、各自まとめてもらうこととしている。ここでの目的は「生徒と授業者の足並みをそろえる」ことにある。「革命」や「近代化」という抽象的な言葉が生徒を「置いてけぼり」にしないよう、その具体像を掴んでもらうところから始めたい<sup>60</sup>。

次に②『『市民革命』とはなにか』では、アメリカ独立革命とフランス革命の具体的な経緯を比較・関連させながら学んでもらう。ここでは全授業で生徒が調べてきた記述を土台としつつ、授業者が教科書の内容を補足するパートとしたい。なおここでは、大西洋を超えて「革命」が伝播したという事実を強調したい。次の③のパートにおいて、ブランキの視点からフランス革命を想起しながら産業革命について考えるからである。

そして③「産業革命はいつから生まれたのか」で、ブランキの史料を読解してもらう（附録参照）。ここでは、「最初に産業革命を『革命』と呼んだ人は、なぜこの言葉を用いたのか」という問いのもと、ブランキの諸情報を確認したのち、フランスからみたイギリスがどのように映っていたのかを史料から読み取ってもらう。ただしこれらの問いだけで史料を読み取るのは難しいので、生徒が①～②の授業でまとめた内容を適宜参照しながら、授業者が設定した設問に答える形で読解を進めることを意図している。ここにおいて、「革命」が事象としてはじめから存在したのではなく、その時代を生きた人々の解釈のもとで構築されていくことを理解してもらえるようにしたい。

④「イギリス産業革命はどういったところが革命だったのか」では、産業革命における技術の「革命」的側面を取り扱う。ここでは綿工業、製鉄業、蒸気機関に関する資料

<sup>59</sup> 本企画における現場教員による「実践」と、教員志望学生の「理想」の授業案とを突き合わせるという報告内容を鑑み、本稿は「理想」の授業案としての位置付けであるため、あえて生徒観は設定していない。

<sup>60</sup> 「近代化」については⑥で改めて問うため、ここでは「革命」との関連を触れながら授業者が軽く触れる程度にする。なお、「歴史への扉」で「近代化」と「時間概念の誕生」について取り扱っている前提のため、生徒たちは「近代化」概念自体にはすでに触れたことのある想定である。



計画が必要である。その一方で、「歴史的思考力」（歴史的なものの見方考え方）を重要視した授業の可能性の一端を示せたのではないかと思う。

論点は、例えば「市民革命」「奴隷貿易」をどこまで扱うかなど、「公共」や「世界史探究」との差別化をどう考えるか。教材作りの材料（史料や参考文献）を十分に得られる環境はあるか<sup>64</sup>。生徒の取り組みの評価方法はどのように設定するか、などである。

なお本稿で示したかったのは、「歴史総合」という科目の特性上、教科書にのっている内容を「網羅」するのではなく、幾つかキーとなる歴史的事象を軸として内容を精選すれば、「歴史的思考力」（歴史的な見方考え方）養成を十分に目指すことができるのではないかということである。しかし、本稿では結局のところ「産業革命」という素材の「膨大さ」に振り回され、時間的な余白のない授業計画になってしまった。フランスの政治的変動とイギリスの産業構造の転換とを重ねて「革命」と表現したブランキの史料を結節点として、「市民革命」と「産業革命」とをうまく繋げつつ、「革命」という言葉の歴史的な「構築性」を示したかった。より効果的な教材を開発するならば、「移動する主体」に着目するほうがよかったかもしれない。この点も踏まえ、この授業構想が教材研究や授業開発の一助となれば幸いである。

---

<sup>64</sup> 例えば今回使用したブランキ史料は大学の図書館がないと閲覧できないだろう。



附録一覧

< 仮想の年間指導計画 >

大項目（＝各単元）	中項目	授業者からの問い
「歴史への扉」	歴史と私たち 歴史と史資料	「遅刻の誕生」はいつから？
序章		「大航海時代」と「大交易時代」の違いは？（仮）
「近代化と私たち」	近代化への問い 結びつく世界と日本の開国 国民国家と明治維新 近代化と現代的な諸課題	「近代化」「革命」とはなにか 「市民革命」とはなにか 産業革命はいつから「革命」と呼ばれたのか イギリス産業革命はどういったところが「革命」だったのか 「生活革命」とはどのようなものか 日本にとっての「革命」はなにか 「近代化」「革命」とはなにか
「国際秩序の変化や大衆化と私たち」	国際秩序の変化や大衆化への問い 第一次世界大戦と大衆社会 経済危機と第二次世界大戦 国際秩序の変化や大衆化と現代的な課題	「大衆」って誰のこと？（仮）
「グローバル化と私たち」	グローバル化への問い 冷戦と世界経済 世界秩序の変容と日本 現代的な諸課題の形成と展望	「グローバル」と「ナショナル」の違いは？（仮）

＜テーマの授業計画表（各2時間ずつを想定）＞

タイトル	目的	内容と展開の概略	授業・課題の方法
0. 「『近代化』への扉」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒と授業者の足並みをそろえる</li> <li>・「近代化」を学ぶ意義を考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・導入</li> <li>発問:「革命」という言葉をきいたことがあるか 例: ショパン、大富豪(トランプ) …</li> <li>・教科書で「革命」を調べてみよう アメリカ独立革命 フランス革命 産業革命</li> <li>・辞典で「革命」を調べてみよう</li> <li>・歴史学者による定義をみてみよう (『比較革命史の新地平より』)</li> <li>・「革命」とはどういった意味だろう</li> </ul>	講義 資料読解
1. 「市民革命」とはなにか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「市民革命」とは何かを学ぶ</li> <li>・「国民国家」の形成について学ぶ</li> </ul>	アメリカ独立革命とフランス革命を比較	講義 教科書読解 プリント整理(板書)
2. 最初に「革命」という言葉を使った人は、なぜそのように	ブランキが「革命」という言葉を使った歴史的背景を知る	※プリントを提示	講義 史料読解

呼んだのか			
3. イギリス産業革命はどういったところが「革命」だったのか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「三つの技術革新が、どのような社会の変化をもたらしたか」を考える</li> <li>・ブランキの史料と照らし合わせ、認識の違いを探る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・技術革新（綿工業、製鉄業、蒸気機関）をそれぞれ三班に分かれ、探究してもらう。</li> <li>・エネルギー革命、交通革命、生活革命に繋げる。</li> </ul>	知識構成型ジグゾー法
4. 「生活革命」とはどのようなものか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「生活革命」がどのようなものだったかを考える</li> <li>・ブランキの史料と照らし合わせる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒に問いを立ててもらおう/「生活」について ヒント:「平等・格差」というキーワードと、児童労働や女性の格差に関する資史料 児童労働、家父長制、社会構造の変化（徒弟制から資本家-労働者へ）</li> </ul>	Google Form やロイロノートで提出・フィードバック
5. 中間まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「市民革命」と「産業革命」とはなにかをまとめる</li> <li>・授業者から次の授業に向けて「日本ではどうだったのか」という問いをなげる</li> </ul>		Google Form やロイロノートで提出・フィードバック
6. 日本にとっての「革命」はなにか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国の「革命」の日本への影響と、日本自体の「革命」がどのようなものだったかを考える</li> <li>・「明治維新」は「革命」だったのかを考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・導入 ペリーがのってきたのはどんな船？ ⇨蒸気船</li> <li>・ペリー来航の目的</li> </ul>	

		鯨油 ・日本の「開国」「明治維新」 ⇨「近代化」	
7. まとめ	・ポメラantz「大分岐」の紹介 ・「近代化」を「革命」で説明してみよう ・日本とヨーロッパ(イギリス)の「近代化」の共通点は?違いは? ・これまでの授業でやってきたことをまとめて知識や思考を体系化する		

<ブランキの史料読解用の授業プリント案（報告者作成）>

第I部 近代化と私たち 第2章 近代ヨーロッパ・アメリカ世界の成立

1. ヨーロッパ経済の動向と産業革命/2. アメリカ独立革命とフランス革命

LQ. 「産業革命」はなぜ「革命」と呼ばれるようになったのか？

・MQ. 最初に「革命」と呼び始めた人は、なぜ「革命」と呼んだのか？

—SQ. 最初に「革命」と呼んだ人はどんな人？

—SQ. フランスからみたイギリスはどのように映っていたのだろうか？

=「革命」と呼んだ人は「革命」をどのようなものだと考えていたのか？

SQ. 最初に「革命」と呼んだ人はどんな人？

プロフィール

名前:ジェローム・アドルフ・ブランキ(1798-1854)

南フランスのニース生まれ パリに移住

家族 父:ジャン・ドミニック・ブランキ(地方役人/のち国民公会の下院議員)

弟:ルイ・オーギュスト・ブランキ(暴力主義的革命家)

職業:フランスの経済学者



画像の出典:[ジェローム・アドルフ・ブランキ - Wikipedia](#)(最終閲覧 2022/8/17)

SQ. フランスからみたイギリスはどのように映っていたのだろうか？

☆史料を読んでブランキの主張を読み取ろう！

ワットおよびアーカライトの発明によってイギリスで展開された経済革命について

(1)フランス革命は、一触即発の状況の中で、人々にとって大きな社会的経験だった一方、イギリスは産業の領域において自己の経験を開始していた。18世紀末は、数多くの驚くべき発明によって特筆される時代であった。これらの発明は世界の様相を変化させ、発明家たちの力を予期しなかったほど増大させる運命を有していたのである。労働の条件は、社会が始まって以来今日まで経験したもののなかでもっとも大きく改変された。それ以来、不滅の二つの機械、すなわち蒸気機関と紡績機とは、古い商業制度を転覆させ、同時にわれわれの祖先の知らなかったような、社会問題と生産物を生み出した。(2)小さな労働者たちは大資本家の支配を受けるようになり、紡績機は紡ぎ車と代わり、蒸気機関は馬の力と代わったのである。同時にブリッジウォーター侯の運河開鑿に関する立派な企画はようやく実を結び、輸送の改善は商品の増加と歩調をとめた。鉄の生産およびその他の金属の生産は、排水作業に蒸気機関を使用することによって活発となった石炭の生産とともに、著しく改善された。イギリスは新しい鉱山を発見したようなもので、予期しなかった宝庫によって一挙に富裕になったといわれている<sup>1</sup>。

問い①

ブランキは波線部(1)において、イギリスの産業革命を何(出来事)と比較しているか。

問い②

波線部(1)における、「大きな社会的経験」とはなにか。①で解答した出来事を教科書で調べて書いてみよう。 ※ヒント…この時、フランスでは何が大きく変化したのだろう。

<sup>1</sup> ブランキ『欧州経済思想史』pp. 395-396。難解な日本語や表現は授業者が改訂。適宜補足。

**問い③**

ブランキは、「発明」によって「生産物」と「社会問題」とが生まれたと考えている。波線部(2)において、「生産物」と「社会問題」にあたると思われる部分をそれぞれ列挙しよう。

**「生産物」**

--

**「社会問題」**

--

**問い④**

波線部(2)において、新しくできた「生産物」がもたらしたのは何か。

--

**問い⑤**

③で書いた「社会問題」は、具体的にはどのようなものだろうか。下の史料を読んで考えてみよう。

…家長的労働から、工場内の新しい奴隷たる労働者を賃銀という領主権に結びつけている産業的封建制度への移り変わりは、たとえその急速さのために住民を困惑させはしたものの、イギリスの生産者になんらの警告をも与えなかった。彼らは機械がこれほど大きな力と、これほど多くの心配とをもたらすであろうなどは、まったく予見していなかったのである。後に彼らの間に広がった貧困は、未だ驚異的な形では現れていなかったし、また機械工業は、後日多くの労働者に致命的なものとなったその生産力を、未だ発展させていなかったのである。しかしながらこの二人の偉人、すなわちワットとアークライトとの天才からようやく生れ出たばかりの産業革命は、イギリス全土を席卷し始めていた。18世紀の終わりに欧州で消費していた綿織物はことごとくインドからきていた。しかし25年後には、イギリスはかつてそこから同様の品物を買っていたその国にむかって、それを輸出するに至った…<sup>2</sup>。

<まとめ> 最初の問いに答えよう

LQ. 産業革命はなぜ「革命」と呼ばれるようになったのか？

自分で本日の授業内での問いを立て、解答を作成しよう。

<sup>2</sup> ブランキ『欧州経済思想史』p. 396



### 「先行授業案」一覧

- ・産業革命（教材共有サイトで「産業革命」と検索）

佐伯彩：「男にとって女にとって、みんなにとって最もよりよい生き方とは？」

野々山新：「工業化の進展は私たちの生活を豊かにしたんじゃないなかったの？」

佐伯圭祐：「資本主義はなぜ・どのように拡大するのか？」

武井寛太：「産業革命は“人々”に豊かさを与えたのだろうか？」

大橋康一：「産業革命と印象派」

武井寛太：「なぜ産業革命以前は中国の方がイギリスより経済的に繁栄していたのか？」

武井寛太：「産業革命は人々を“どの程度”豊かにしたと語るべきか」

武井寛太：「『日本の産業革命は短期間で達成！近代化・発展スゴい！』の語りで良いの？」

佐伯圭祐：「産業革命によって、人は『幸せ』になったのか」

佐伯圭祐：「『産業革命に成功した明治日本』で、『貧乏』は個人の責任だったのか」

※「教材共有サイト 2.0: 高大連携歴史教育研究会」より。<https://kodai-kyozai2.org>  
(20230127 最終閲覧)

### 参考文献

岩井淳・山崎耕一編 2022: 『比較革命史の新地平：イギリス革命・フランス革命・明治維新』山川出版社

勝山元照「新しい世界史教育として「歴史総合」を創る —「自分の頭で考え、自分の言葉で表現する」歴史学習への転換—」小川幸司編著 2021: 『岩波講座世界史 01 世界史とは何か』岩波書店 pp. 307-24

北村厚著 2018: 『教養のグローバル・ヒストリー：大人のための世界史入門』ミネルヴァ書房

北村厚著 2021: 『20 世紀のグローバル・ヒストリー：大人のための現代史入門』ミネルヴァ書房

徳原拓哉 2022: 「歴史総合における問いのスケール化とカリキュラム：「フラクタル構造としての問い」モデル」『山川歴史 PRESS』6、pp. 6-10

高校歴史教育研究会編 2022: 『資料と問いから考える歴史総合』浜島書店

長谷川貴彦 2012: 『産業革命（世界史リブレット）』山川出版社

原田智仁 1984: 「『イギリス産業革命』の授業構成」『社会科研究』32、pp. 37-47

ブランキ、J. A. 著（吉田啓一訳）1965: 『欧州経済思想史』有信堂

三浦信孝・福井憲彦編著 2018: 『フランス革命と明治維新』 白水社

矢口考次郎 1966: 「産業革命の源流 ―特にエンゲルスの見解について―」『關西大學經濟論集』 16 卷 (4-5 号) pp. 513-26

歴史学研究会編 2022: 『歴史総合をつむぐ ―新しい歴史実践へのいざない―』 東京大学出版会

渡部竜也・井手口泰典 2020: 『社会科授業作りの理論と方法 ―本質的な問いを活かした科学的探求学習―』 明治図書出版

### 参考 Web サイト・動画

「NHK 高校講座 歴史総合」[NHK 高校講座 | 歴史総合](#) (20230127 最終閲覧)

「教材共有サイト 2.0 高大連携歴史教育研究会」より。<https://kodai-kyozai2.org> (20230127 最終閲覧)